

目的； 和服の意識や着用状態は色々の要因，例えば年齢や地域などにより異なると思われる。そこで，わが国の和装文化に深く係わりのある京都地区で，女子大生とその母親を対象に和服の意識について調査した。この場合，京都地区の調査結果を東京地区の調査結果¹⁾とも対比し考察した。

方法； 1) 和服の意識について，35の質問項目を選定し，5段階尺度（そう思う～思わない）を用いて評定してもらった。評定結果をもとに，因子分析により基本的因子を抽出し，因子得点から各被験者の関係を検討した。2) 和服の種類（振袖，小紋，ゆかたなど8種類）と着装場面（親族の結婚式，パーティ，お茶会など15場面）について，和服着用のふさわしさを4段階尺度（ふさわしい～ふさわしくない）を用いて評定してもらった。3) これらの結果をもとに，母親と学生による違い，京都地区と東京地区による違いを中心に考察した。なお，被験者の有効回答数は学生286名，母親110名であり調査時期は62年10月である。

結果； 和服の伝統・規範性は学生より母親の方が重視している。また，学生，母親ともに，和服には伝統的な美しさを認め，女らしさを表現でき，あらたまった場にふさわしいとしているが，特に京都在住者はその傾向が強く，ステータスシンボル性もみられる。和服は種類により，最適な着装場面があると考えられているものが多く，このような傾向は京都在住の母親の方が強い。

文献； 1) 小林；日本家政学会研究発表要旨集，p124（1986）